
ポケットモンスターAfter Story

ダッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターAfter Story

【Nコード】

N8173P

【作者名】

ダッチ

【あらすじ】

17歳になったサトシはポケモンマスターになるという夢を諦めかけていたが、

ある人の誘いでまた新たな旅に出ることになる。

t h e d o o r

時は7年後：

サトシは17歳になった。

しかし、夢である『ポケモンマスター』になれずに

このまま普通にどこかの企業へ入社して、

ピカチュウやその他の仲間達と暮らしていこうかと考えていた。

某日、マサラタウン。サトシ宅

『今日のポケモンコーディネーターは17歳という若さで新人コーディネーター賞を獲得。様々なメディアでも取り上げられ今、絶好調のハルカさんに来ていただきました！』

『どうも、ハルカです！』

「すげえなハルカは。もうプロのコーディネーターになってんだもんな」

自分の部屋でテレビを見ながら呟くサトシ。

以前はポケモンに関するテレビが流れると、テンションが上がって立ちながらかじるようにテレビに食いついていたが、今は床に寝そべりながら見ている。

かつて、仲間だったハルカの活躍が見ていて嬉しい反面、自分の情けなさに気づく。

「タケシはポケモンドクターになって自分の病院も持って、ヒカリもコーディネーターになろうと修行中、ケンジはポケモン博士になるために一人旅、カスミやアイリスやデントもジムリーダーをやっ

てるのに俺だけ……」

誰もいないから呟いてるんじゃない、自分の弱さに呆れているサトシ。

ポケモントレーナーになったあの日、遅刻はしたものの期待に胸を膨らませ旅立ったあの時のことを思い出した。

「あの時に戻れたらなあ……」

誰もが後悔した時に言ってしまうセリフをかすれた声で言う。

そんな中

・ピンポーン

呼び鈴がなった。

「はい」

サトシの母・ハナコが玄関のドアを開ける。

そのドアこそがサトシの新たな旅の幕開けとなった。

再会

・ピンポーン

「はい」

サトシの母・ハナコがドアを開ける。

「こんにちは」

とある人物が挨拶をする。

「サトシ！お客さんよー！」

「お客さん？シゲルは研究所だし、ケンジはいない…オーキド博士か？」

サトシは訪ねてきた客が誰だが予想する。

確かに、確率から言えばオーキド博士である可能性が一番高い。

しかし、予想とは遠くかけ離れていた。

「久しぶり、サトシ！」

「なあ〜んだ『世界の美少女』か」（笑）

そこにいたのは、お馴染みの髪型で以前共に旅していた時よりも成長したカスミだった。

「何で笑うのよ？失礼じゃない」

サトシは初めてカスミと会った時、自分で『世界の美少女』と言ったことを思い出し、今じゃそれをカラかいのネタにしてしまうほどだ。

「ご、ごめんゴメン。美人三姉妹の四番目って、ウウウウぐ、ぐるじい」

「最近アタシ、プロレス技を覚えたの」

「ヘッドロックとは、それよりも早く」

「なによ？アンタが謝るのが先じゃない！」

「ち、違う。当たってる」

「へっ？ちよ、もう変態！！」

「ぶほお」

どうやら、サトシの後頭部がカスミの一番成長した箇所当たったらしく、素早く技を解いた瞬間に渾身の『きあいパンチ』を喰らったサトシ。

「うう。ヘッドロックの次はきあいパンチってカスミはかくとうタイプだなっ」

「なあに言ってるんのよ！全然面白くない！」

「ところで、カスミちゃんは何で来たの？」

一部始終を見ていたハナコが一番の疑問を尋ねる。

「ああ、そうでした。サトシ。今までゲットしたバッチはちゃんと持ってる？」

「ん？ああ、ちゃんと持ってるぜ」

「そう、じゃあ、とりあえずオーキド博士の所に行きましょう」

「えっ？オーキド博士の所に？何で？」

「理由は後から言うから、今はとにかく」

「いってらっしゃい。サトシ」

「ママ、ちよつと待って今テレビ見てたんだから」

「いいから行くー！」

カスミのちよつと強引な性格は旅をしていた時と同じ、いやそれ以上になってしまった気がするサトシだった。

きっかけ

「オーキド博士、サトシを連れてきました」

「うむ、ご苦労じゃったのうカスミ君」

サトシはカスミの言われるがままオーキド博士の研究所へ来ていた。
「単刀直入じゃがサトシ。今まで集めた5つの地方のバッジ40個はちゃんと持っておるか？」

「もちろんだよオーキド博士。あんな大切なもの失くすはずないだろう？」

「うむ、それならいいのじゃが」

「オーキド博士。アタシも気になっていたんですが、それがどうしたんですか？」

「……………」

オーキド博士は黙り込んだ。

イツシュリーグから帰ってもう7年、サトシがブランク状態と考えるところ言う気になれない。

「オーキド博士、ちゃんと行ってくださいよ」

サトシも謎が解けないままでは何とも言いようがない。

「実は、サトシにジムリーダーにならないかと誘いが来てるのじゃが……………」

「「えっ？」」

この言葉にはカスミも驚く。ジムリーダーとはそう簡単になれるものじゃない、その上サトシには7年というブランクがある。

「ちなみに、誰からですか？」

依頼主が気になるサトシ。それもそのはず、サトシは多くのジムリーダーとの親交が深い。

「アメリカのニューコウル地方のベルモニアシティのベルモニアジムのジムリーダーからなのじゃが……………」

「アメリカ？」

驚くのも当然だ。サトシが今まで旅してきた地方はカントー、オレンジ諸島、ジヨウト、ホウエン、シンオウ、イツシュ、その他色々だがすべて国内、日本だ。アメリカのトレーナーの知り合いはいない上に行ったこともない。そこから誘いが来る理由も思い当たらない。

「どうするかのう？やはり、断っておくかのう？」

「いつまでに、返事すればいいんですか？」

「うーん、細かい期限は言ってはおらんかったが、そう早くなくてもいいとのことじゃ」

「オレ、行きます！」

「サトシ！本当に大丈夫なの？7年もまとまなバトルはしてないんでしょ？」

「基本くらいは覚えてるさ。それに、アメリカだぜっ？まだ、見たことないポケモンがいっぱいいるはずだぜ」

やはり、ポケモンのことになると居ても経ってもいられないんだとオーキド博士もカスミも思った。

「でも、それとバッジが何の関係に？」

「うむ。6つの地方のバッジ、つまり48個バッジを集めると、今回から新しく開催されることとなった『マスターカップ』に出場することができるのじゃ」

「マスターカップ？」

「テレビで言っていましたね。ポケモンマスターになる最大にして最難関の道だって」

「そうじゃ。しかし、必ずニヶ国以上のバッジを持たねばならぬらしく、向こうでも言われるとは思うのじゃが、ジムリーダーになれるチャンスじゃし、どちらが良いのかは・・・」

「オレ、マスターカップに出ます」

「では、ジムリーダーの誘いは断っておくのじゃな？」

「はい。向こうには申し訳ないですけど、オレやっぱりポケモンマスターになりたい」

「本気なの？サトシ」

カスミはいささか不安のようだ。

「大丈夫だって、絶対優勝してみせる！」

「……じゃあ、アタシも行く」

「えっ？カスミも行くの？ジムの方は？」

「いいのよ。便利な弟子がいるから。頼りになるし」

「では、出発は明日の朝でいいかのう？」

「はい。オレ、ママに言っておきます！」

「そうかそうか。宜しく頼むぞい」

「はい！」

こうしてサトシの挑戦は7年ぶりに始まった。

仲間

翌日、ワクワクで一睡も寝れなかった……なんてことはなく、逆にぐっすり眠っていたサトシ。

いつもより元気なようだ。

「気をつけて行ってらっしゃい。まあ、カスミちゃんがついてるから心配はないと思うんだけど……あなた無茶するから」

「大丈夫だってママ。オレはたっくさん旅してきたんだぜっ」

「そうね。気をつけてね」

母・ハナコは本当は心配よりも嬉しい気持ちでいっぱいだ。自分の息子が夢や希望を失くしたまま大人になってほしくなかった思いが少しは晴れたからだ。

「行つてきます！」

《ピカピカ！》

相棒のピカチュウもハナコに行つてきますの挨拶をする。その姿はまるで『サトシのことは任せてっ』と言わんばかりだ。

ガチャッ

玄関の扉を開ける。すると……

「サトシ、今日は早起きのね」

「カスミ。何だよその言い方は？」

「17歳にもなつて寝坊するか、ママに起こしてもらつ情けない人かどうか確認したのよっ」

「何だよっ！自分は17歳のくせにまだ虫ポケモンは嫌いじゃんかっ」

「それとこれとは関係ないでしょっ！？乙女はみんな虫が嫌いなのっ！」

「フンツ。ハルカとかヒカリとかアイリスはカスミと同じ年なのに全然虫ポケモンは嫌いじゃなかったぜ」

「何ですって！」

「何だよ！」

初日からケンカする二人、先が思いやられる。そんな二人をピカチユウが仲裁に入る。

《ピカピ、ピカピ、ピカピーカ》

が、しかし

「……（バチバチ）」

二人は視線から火花を散らしているためピカチユウの仲裁が見えるはずもない。

「あおう、仲良いところ悪いんだけど……」

「どこがつ！」

「誰かサトシの名前を呼んでない？」

「えっ？オレの？」

サトシ、カスミ、ピカチユウは耳を澄ませる。

「……ーい」

確かに声がする。だけど、聞いたことのない声だ。

「……トシ。サートーシー」

声はだんだん近づいてくる。

「あつ、誰か来たわ」

カスミが微かに見える人影を指差した。

「サートーシー」

そして、ようやくサトシ達の前に現れる。

「……ぜえー、ぜえー」

流石に走り疲れたのか、息を切らしている。

「君は？」

サトシが一番解決したい疑問だ。サトシは割と人の顔を忘れない人だが、見たことのない人だと本人は判断した。

その男の子はサトシより少し背が低く、アシンメトリーの前髪とそんなに長くない後ろ髪。

長ズボンは裾を少しロールアップさせて、半そでのパーカーを着た

少年だった。

「やだなあ。ボクのこと忘れちゃったの？サトシ」

「もしかして……マサト？」

「ああ、そっだよ」

何とそこにいたのは以前サトシと旅をしていたハルカの弟のマサトだった。

彼のトレードマークともいえる黒くて大きいメガネをかけていなかったから余計に気づかなかった。

「マサト、大きくなったなあ。ってことは、もう14歳かあ」

「うん。とつくにポケモントレーナーになったんだよ」

《ピカピカ》

「やあ、ピカチュウ。久しぶりだね」

マサトは挨拶代わりにピカチュウの頭を撫でる。

《ピッカチュウ》

ピカチュウは嬉しい表情だった。

「どうして、こんな所に？」

「ボク、ポケモントレーナーになってから一人でホウエン地方とシンオウ地方をまわってポケモンリーグに出場したんだけど、どっちもいい結果を出せなかったんだ。それで、次はどの地方に行こうかって考えてた時、オダマキ博士から連絡があつて、サトシがアメリカに行つてマスターカップに出るって言うから急いで来たんだ」

「じゃあ、ホウエン地方から一晩でここまで？」

「違うよ、昨日ボクはニビシティに居たんだ」

「ニビシティ？何で？」

「タケシにポケモンフーズの作り方を聞こうと思ってね。でも、タケシはイツシュ地方でポケモンドクターやってるみたいでいなかったんだ」

「そっだな」

「んで、サトシはアメリカに行くの？」

「うん。今から出発するところ」

「ここから国外線のある空港ってヤマブキシティじゃない？今日中には着けないんじゃない？」

「大丈夫よ、マサト君。お姉ちゃんがいるから」

「カスミさん。どういうこと」

「後ろを見てごらん」

言われた通り後ろを向くと、

「あなたがマサト君ね。カスミからちょっとだけ話は聞いてるわあ。カスミのお姉さんのサクラが挨拶する。」

「この人が前にカスミさんが言ってたお姉さん？」

「カスミでいいよ。うん、そうよ」

「美人でスタイルよくて、礼儀のいいお姉さんじゃん。何で、困ってるの？」

「まあ、まずはマイペース過ぎるってところもあるけど、今に分かると思うわ」

「ええ？それってなあに？」

「それで、マサトは何でオレのところ？」

「ああ、そうだった。えっと…ボクもサトシと旅がしたい！」

「えっ？」

「サトシ、ボクがポケモントレーナーになったらバトルしてくれるって約束したよね？それもあるけど、気づいたんだ。旅は一人じゃ寂しいことに」

「でも、大丈夫なのか？ママやセンリさんも心配してるんじゃない？」

「だったら、まず旅に行かせないでしょ。7年前も」

「そっか、確かにあの二人なら止めないかもな。ようし、挨拶も兼ねてオーキド博士のところに行こう！」

「やったー！」

そのマサトの喜び方も今と昔じゃ全然違っていた。そして、新たな仲間が増えた。

「よっしゃ、オーキド研究所だな。任せろっ！」

「……カスミのお姉さんだよな？」

「車に乗ると人が変わるのよ」

対決（前書き）

訂正します。

僕はイッシュ地方のことを

カントー地方などの地方と同じ国、つまり日本みたいなところだと勘違いしていましたが、

イッシュ地方のモデルはニューヨークだそうです。

しかし、ここは開き直って、イッシュ地方は日本、サトシ初めての国外での旅にしたいと思います。

対決

「こんにちは。オーキド博士」

「君、もしかしてマサト君かい？」

「はい。そうです」

「おお、しばらく見ない間に大きくなったのぉ。声も変わってるのぉ」

「まあ、それほどでも…」

オーキド博士の言葉に照れるマサト。

「オーキド博士、俺達これからアメリカに行きます」

「うむ。チケットは昨日渡した通りでいいのじゃな？」

「はい。行く前に、みんなに挨拶しようかなって」

「まだ、あと3時間もあるわねえ」

時計を見ながら告げるカスミ。

「じゃあ、サトシ。サトシのポケモンを見せて！」

「いいぜ。オーキド博士。俺のポケモン達って庭ですよね」

「うむ、そうじゃ」

「じゃあ、マサト庭に行こうってうわっ！」

《《ベトベト》》

サトシのベトベトンが久しぶりにサトシに会えた喜びからかサトシに抱きつくっというよりはのしかかった。

「こ、こらベトベトン。嬉しいのは分かるけど、重い」

「サトシのベトベトンって人懐っこいんだね」

そして、サトシは自分の色んなポケモンをマサトに見せた。個性的なサトシのポケモンはマサトの心をくすぐった。

サトシがマサトにポケモンを見せて一時間。

「ねえ、サトシ。ポケモンバトルしよ！」

「飛行機まであと二時間、移動時間も考えて……余裕だな。よし！ やるうぜ」

「じゃあ、アタシ審判するね」

カスミが審判を買って出た。

「では、これからサトシvsマサトの試合を始めるわよ。使用ポケモンは一体、どちらかが戦闘不能になるまでよ」

「サトシはどうせピカチュウを出すんでしょっ？じゃあ、ボクはいけっ！」

マサトがモンスターボールを投げる。

ボールは放物線の頂上で開き、白い光に包まれてマサトのポケモンが現れる。

《ラージ！》

「ラグラージか」

「そう、オダマキ博士からミスゴロウを貰って、育てたんだよ。どうする、サトシ？ピカチュウじゃ、じめんタイプもあるラグラージには不利だと思うけど……」

「バトルは相性だけじゃ決まらない！それに、見たらどう？カナズミジムでツツジさんのイシツブテに電気技で勝ったあの試合を」

「確かにあれはすごかったよ。でも、それだけじゃボクには勝てないよ」

「じゃあ、ピカチュウの先攻でバトル開始！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

「ようし、ピカチュウ。でんこうせっか！」

《ピッカー！》

ピカチュウが得意技で一気にラグラージに近づく。

「ラグラージ。とっしん！」

ラグラージも負けじとピカチュウに突っ込む。

そして、二人は激突、しかし、力ではピカチュウの方が負けている。ピカチュウは軽く宙に浮いた。

「ピカチュウ。アイアンテール」

《チュウ。ピッカ!》

「ラグラージ。まもる」

《ラージ!》

《ピカ?》

「しまった。守られた」

「ラグラージ。アームハンマー!」

《ラージ!》

ラグラージの手が光り、ピカチュウに大きなダメージを与える。

そのまま吹っ飛ばされるピカチュウ。

「ああ、立つんだピカチュウ!」

《ピッカ、チュウ!》

サトシの期待に応えるピカチュウ。

打たれ強さではサトシのポケモン一だ。

「ようし、ピカチュウ。10まんボルト!」

《ピカチュウ!》

ピカチュウが一番出してきたであろう技を繰り出す。

《ラージ!》

さすがのラグラージも躲すことはできず、まともに喰らう。ラグラージはじめんタイプもあるが、効いている。それが、サトシのピカチュウのすごさだ。

「さすが、サトシのピカチュウだよ。ラグラージ、とっしん!」

《ラージ!》

「躲せ」

《ピッカ!》

「だと思ってたよ。ラグラージ、ハイドロポンプ!」

「何??」

《ピカ?》

《ラージ!》

ハイドロポンプはみずタイプの技の中でも強い技だ。ピカチュウが

ピカチュウは負けたが嬉しかった。久しぶりに本気で戦えたのだから。

「それじゃ、そろそろ行きましょっ」

「ああ、そうだな。じゃあ、オーキド博士オレ行ってきます」

「うむ。頑張るのじゃぞ」

「オーキド博士行ってきます！」

オーキド博士に手を振るサトシ、ピカチュウ、カスミ、マサト。

三人はヤマブキシテイへ向かった。

旅立ち

ここはヤマブキシテイにあるヤマブキ空港。

カントー地方で国外線のある空港はこの空港を含めて2つ

あとはセキチクシティにあるのでここが一番近い。

空港の前で車から降りる三人。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「帰る時はちゃんと連絡するのよ」

「分かってるって」

「サクラさん。ありがとうねっ」

「ありがとうございます」

「二人とも、カスミを宜しくねっ」

「「はい」」

「じゃあ、ワタシはもう行くわ」

「うん。じゃあねっ」

カスミ達がサクラに手を振り見送る。

「よっしゃ！ いっちょ飛ばしていくかっ！」

轟音を響かせ空港を去るサクラ。

「もう、お姉ちゃんったら、他の人の迷惑を考えてほしいわっ」

「しょうがないよ。人格が変わっちゃうんだから」

「サトシ、カスミ。早く乗ろうよ。搭乗時間もあと少しなんだから」

「そうだな。早く行こう」

サトシ達は空港で手続きを済ませる。

ちなみに、ポケモントレーナーならポケモン図鑑の身分証明書がパスポート代わりになるのだ。

手続きを済ませ、いざ、飛行機に乗ろうとするサトシ。

しかし、

「ちよつと、その帽子を被ったキミ！」

帽子を被ってるのは周りを見渡してもサトシしかいないから、自分だつてことに気づく。

「はい、何でしょう？」

「そのピカチュウをモンスターボールにしまいなさい！」

「えっ？」

《ピカ？》

「ハイジャック防止の為よ。そのピカチュウをモンスターボールにしまわないと飛行機に乗せる訳にはいかないわっ」

確かに、ポケモンを飛行機に乗せるのはジャックされるリスクを伴う。したがって、モンスターボールの持ち込みも禁止だ。

「でもオレのピカチュウはモンスターボールに入るのを嫌がるんですよ」

「そんな理由にはならないわ」

「で、でも…」

「サトシ、こんなこともあるつかと、オーキド博士からピカチュウのモンスターボールを貰ってきたよ」

「マサト、流石だぜっ。サンキュー」

サトシはマサトからモンスターボールを受け取る。

「さ、ピカチュウ。モンスターボールに入るんだ」

《ピ、ピーカ》

サトシはピカチュウにモンスターボールに入るよう催促するが、勿論ピカチュウは拒む。

「ピカチュウ、入ってくれないとオレもアメリカに行けないんだ。

お願いだピカチュウ」

ピカチュウがモンスターボールに入るのが嫌いなのは承知だ。それを理解した上でサトシはピカチュウに頭を下げる。

《ピカピ…》

その姿を見たピカチュウはサトシの愛を感じた。

《ピッカチュウ》

ピカチュウは頷いた。

「ピカチュウ。入ってくれるのか？」

《ピカチュウ！》

「ありがとう。じゃあ、入るんだピカチュウ」

モンスターボールのスイッチから赤い閃光がピカチュウの体を包み、その光がスイッチへ戻る。ピカチュウは7年ぶりにモンスターボールの中へ入った。

「じゃあ、そのモンスターボールを小さくしてこっちへ渡してください」

「はい」

サトシは言われるがまま警備員のお姉さんに渡す。

最初はロケット団の畏かと疑ってはいたが、そもそもロケット団はサトシの旅立ちを知らない。

何の事件も起きず、そのまま搭乗するサトシ達。

「本日はヤマブキライン、ニューコウル地方、クレザシティ行きへご搭乗頂き誠にありがとうございます。当飛行機は間もなく離陸いたします」

アナウンスが流れ、そのまま離陸、大空へ向けて飛び立つ。

フライトは6時間。1日の4分の1は飛行機にいることになる。正直に言えば退屈だ。

「マサト、もう寝ちゃったのか」

「今日、結構走ってたしね」

カスミが窓側、サトシが真ん中、マサトが通路側となっていて、疲れが出たのか、眠りにつくマサトを見守るサトシとカスミ。

「ねえ、サトシの旅の話でも聞かせてよ」

「おう、いいぜ」

それから、サトシはハウエン、シンオウ、イッシュでの旅の思い出をカスミに話した。

しかし、その内容はカスミにとってはどうでもいいことだった。

カスミはただ、サトシが話す時の真剣な顔、思い出し笑いをするサトシの笑顔、サトシの声をただ一人占めしたかっただけなのだ。今まで旅できなかつた分を含め、サトシを感じていたかったのだ。眠ると意外と可愛らしい寝顔も見たいとは思っていたが、それは旅した時にさんざん見たから充分なようだ。

カスミはサトシと旅できなかった7年の時間をたつた6時間で取り戻そうとしていたのだった。

新しい大地

アメリカ、ニューコウル地方、クレザシティ。

いわゆるオフィス街となっており、高層ビル等が立ち並ぶ発達した街である。

クレザ空港に辿り着いたサトシ達一行。

「すごい人集りだねっ」

マサトがロビーが色んな国から来たもの、これから海外へ行くもので埋め尽くされているのを見てこの街の賑やかさを思い知る。

「これからどうする?」

「とりあえず、オーキド博士に着いたって報告しなきゃ」

カスミの言葉に賛同しテレビ電話へ向かうサトシ。

テレビ電話も昔は少しばかり大きかったが、今やテレビはブラウンから液晶へと変更され、テレビ電話のコーナーは同じスペースでも台数が違う。

「オーキド博士。今、クレザシティに着きました」

『うむ。では、ニシグタウンへ行ってキャリナ博士に会ってくれ』

「ニシグタウンですか?先にベルモニアシティに行ってジムリーダーへの話をしなくてもいいんですか?」

『いや、先にキャリナ博士に会って、新たなポケモン図鑑を買った方がよいじゃろ。それに、サトシがジム戦をすとなればニシグタウンから一番近いジムはベルモニアジムじゃからのう』

「分かりました。じゃあ、今からニシグタウンへ向かいます」

『うむ。頑張るんじゃぞ!』

「はい!」

サトシが通信を切る。

「じゃあ、ニシグタウンへ行くかっ。えっと、地図は…」

「ボク、ポケナビ持ってるよ」

「流石、マサト」

ポケナビも新しくなり、見た目はまるでスライド式の携帯電話だ。

「ニシグタウンはここを北に行けば着くよ」

「ようし。ニシグタウンに向けて行くぞ！」

「その前に、ピカチュウを出さなくていいの？」

「あつ、いつけね。忘れてた」

「もう、ピカチュウがカワイソウでしょっ」

「ついな」

「でも、ここじゃダメだよ。行く時みたいにジャック犯だと思われるから」

確かに、周りを見渡せば、ポケモンの姿がほとんど見られない。

サトシ達は外へ出る。

「ようし、出てこい。ピカチュウ」

サトシはボールを軽く投げると、ボールが開いてピカチュウが現れる。

《ピッカチュウ！》

ピカチュウはやはりボールから出られた嬉しさからか、のびのびとしている。

「ようし。改めて、ニシグタウンに向けて出発っ！」

《ピッピカチュウ！》

「おー！」

「お、おう…！」

張り切るサトシに乗っかるマサトとピカチュウ。

その横でちよつと心配なカスミは小さく手を挙げた。

こうしてサトシの新しい旅が始まる。

新しい大地（後書き）

明けましておめでとございます。

お正月で少しバタバタして更新が遅れてしまいました。

今年も頑張るので応援お願いいたします。

対立

マスターカップ出場を目指すサトシは相棒のピカチュウ、カスミ、マサトとアメリカ・ニューコウル地方を旅している。

今はクレザシティを抜けニシグタウンに向かう途中でツナギの森を進行中。

「ねえ、マサト。そのポケナビ合ってる？」

「もちろんだよカスミ。どうして？」

カスミの不安に疑問を抱くマサト。

「だって、都会の街を出たら急に深い森になってるのよっ。どんな街作りをしているのよ！」

「しょうがないじゃないか。これが一番近道なんだ」

「じゃあ、遠回りでもいいからせめて森以外のコースにしようよ」

「それじゃ、時間がもったいないよ。なっ？ピカチュウ」

《ピーカピ》

多数決だと3対1、カスミの提案は却下される。

「もしかして、カスミ……」

「な、なによっ」

カスミが何に不安を感じているのか読めたようだ。

「むしポケモンに出会うのがいやなのか？」

「ちよ、ちよ、えっ」

「凶星のようだね」

カスミがかなりの動揺をみせる。

「何だ、そんなことかよ」

「そんなこととは何よっ！」

「情けねえなあ。ジムリーダーともあろう世界の美女がむしポケモンにおびえるわ」

「嫌いなものは嫌いなものよっ！か弱い乙女はみんなそういうものなのっ……」

「どこがか弱いんだよっ…」

「アンタ達だつて嫌いなものとかあるでしょっ！」

「オレ、別に嫌いなもんなんてないし…」

「ボクもこれといってないかなっ？」

「信じられない！」

「大体、むしポケモンのどこが嫌なのさ？」

「気持ち悪いでしょっ！ウネウネしたり、カサカサしたり、ブンブンしたりっ！」

「ポケモンはみんなカワイイさ」

「アンタねえ。ポケモンとはこのように…」

カスミはポケからモンスターボールを2個取り出し、大きくして投げる。

そして、2つのボールが開きカスミのポケモンが現れる。

《マリル》

《ギャオオオオ》

「あっ、マリルにギャラドスだ」

マサトがカスミのポケモンに興味を示す。マサトが旅してきたのはホウエンとシンオウのため、なかなかこの2匹と出会うこともないからだ。

「いいっ？ポケモンというのは例えば、マリルのように見た目も仕事も可愛くて見るだけで癒されるポケモンとギャラドスのようにカッコよくて自分を守ってくれそうな頼りになるポケモンがポケモンなのっ！むしポケモンはどっちにも当てはまらないのっ！」

カスミのむしポケモン嫌いは克服どころかエスカレートしている。

「そんなことないよっ！むしポケモンだつて…」

マサトもカスミ同様、自分のボールを投げポケモンを出す。

《テツカ》

「おお、テツカニンだ」

「むしポケモンだつて、カワイイのもカッコイイのもって、あれっ？カスミは？」

「隠れてる。木の後ろ」

「マサト！逃がせとは言わないけど、早くしまつて！」

「今、逃がせつて単語が耳に入った気がするんだけど…」

「奇遇だなあ。オレも聞こえた」

《ピーカチユウ》

《テツカ》

「おいカスミ！テツカニンがカワイソウだろっ？謝れよ
さっきより少し近づくカスミ。

「ご、ごめんなさい…」

「だつてさ」

《テツカ》

「許してくれるみたいだよ」

「でも、とりあえずはしまった方がいいと思つぜ」

「うん。戻つてテツカニン」

マサトがテツカニンをボールへしまつ。と同時に勢いよくカスミが
戻ってくる。

「怖かつたあ」

「何が怖いんだよ…」

「とにかく、虫は無視！気持ち悪いつたら気持ち悪い！」

「一度、カスミはむしポケモンを克服する修行をしたほうがいいと
思つぜ」

「そんなの必要ないわよ！」

「いいや、必要だ！」

「いいえ、必要ない！」

「必要だ！」

「必要ない！」

「必要だ！」

「必要ない！」

「まあ、落ち着いて二人とも」

マサトが仲裁に入る。

「ボク達はポケモントレーナー。ポケモンバトルで決めたらどう？」
前にオーキド博士がラジオで言っていた言葉を引用するマサト。

「そうだな」

「いやよ。サトシは絶対ピカチュウを使うでしょっ！？勝てる訳が

」

「諦めるのかい？世界の美女さん？ジムリーダーのくせに相性を気にするんですかあ？」

「うう。やってやるっじゃない！」

売り言葉に買い言葉とはまさにこのことだと思ったマサトであった。

対立（後書き）

ええ、

僕も、天の河さん同様、サトカスの描写をヤストシさんに任せたい
と思っています。

僕の場合、サトカス派ですが、サトハル派でもあることと

設定が7年後とキャラ設定の崩壊により、

上手く、サトカスを書く自信がありませんw w w

なので、サトカス描写の神であるヤストシさんの作品に期待をしつ
つも、

この作品を見て頂ければ幸いですw

どうですか？ヤストシさん

仲間

「じゃあ、今からサトシ対カスミの試合を始めるよ。使用ポケモンは1体、どちらかが戦闘不能になったら負けでいいね？」

「ああ、いいぜ」

「絶対、負けないわよ」

「じゃあ、試合開始！」

「行けっ！ピカチュウ」

《ピツカチュウ！》

「行くのよ、マーズレディ！」

《サゴサツゴ！》

「サニーゴか。相手にとって不足はない。ピカチュウ、でんこうせつか！」

《ピツカチュウ！》

ピカチュウが目にも止まらぬ速さでサニーゴへ向かう。

「ならサニーゴ、とげキャン！」

カスミもサニーゴへ指示を出す。

すると――

ガサガサッ

木の上から物音がする。

しかし、誰も聞こえないままバトルは繰り広げられようとしたその時、

タラー

《マルイト》

イトマルが木の上からぶら下がって、カスミの前に現れた。

「あ、イトマルだ」

「……………\$%\$##”#\$’%& × !!!」

もちろん、カスミは驚く。

「落ちて着けカスミ。地球言語で頼む。ただ、すげえ驚いてんのは確

かな」

「サトシ、今はカスミを助けた方がいいんじゃない？」

カスミはむしポケモンが大の苦手、それはもうサトシ達の間では常識化されてるが、カスミがむしポケモンを嫌いな分、カスミはむしポケモンに好かれるのだ。

「すいませーん。そのイトマル捕まえてくださーい！
遠くから声が聞こえる。」

「イトマルを捕まえるって言うてるよ？」

「でも、モンスターボールは使えないし、アミは持ってないしなあ」

「アミならあるじゃん」

「えっ？どこに？」

「あれ（カスミ）」

マサトがイトマルに追っかけられてるカスミを指差す。

「マサト、お前って鬼だな……」

もちろん、マサトは悪気があるわけでも、笑を取るためでもなく、マジメだ。

「とりあえず、カスミを捕まえるんだよ」

「っていうか、普通に寝袋があつたよ」

サトシが寝袋を使って、イトマルの捕獲に成功。カスミはそのまま失神する。

サトシはイトマルを女の子に返す。その女の子はサトシ、カスミくらの年齢のちよっとお淑やかな感じのお嬢さん風の女の子だった。

「ありがとう。捕まえてくれて」

「例には及ばないぜ」

「あの、それでそちらに倒れている方は？」

「ああ、カスミって言うんだけど、どうもむしポケモン嫌いだな」

「そうなの、私の名前はティアラ」

「オレ、サトシ。こいつは相棒のピカチュウ」

《ピッカチュウ》

「ボク、マサト。ねえ、ティアラさん。何で、イトマルを持ってる

の？」
「ああ。あそこにある育て屋さんから貰ったの」
「育て屋さん？」
「うん。タマゴから孵ったばっかなんだけど、貰い手が無くて、カワイソウだから貰ったの」
「へえ、慈愛に溢れてるね」
「ありがとう」
「でも、逃げた理由は？」
「それは、あの子、生まれたばかりだから、好奇心が旺盛なのよね。さつき、ご飯をみんなにあげようとしたら、どっか行っちゃって」
「そうなんだ。大変だね」
「まあ、でもそれが生きがいみたいなものなの」
「へえ、それで、これからどこ行くの？」
「えっと、ベルモニアシティに行かなくちゃいけないの」
「ベルモニアシティ？俺達も向かってるんだよ」
「へえ、そうなの？」
「だったら、一緒に行こうぜ」
「えっ？いいの？お邪魔じゃない？」
「大丈夫だよ。旅は大勢が楽しいもん」
「ああ、マサトの言う通りだぜっ」
「じゃあ、お言葉に甘えちゃおっかなっ」
「決まりだ。宜しく、ティアラ」
「こちらこそ、よろしくね。サトシ」
こうして、新たな旅人が一人増えた。
「カスミ、起きろよ」
「んん、むしポケモン撲滅会に入会します…」
「すごい、夢を見てるな。起きろよ！カスミ！」
「んあ？あれっ？アタシ、何してたの？」
「ピカチュウの電撃の流れ弾に喰らったんだよ」
「そう、通りで金縛りのような感覚があったわけか」

(カスミのむしポケモン嫌いはもう、禁断症状まで出るようになってたか)

「それでさ、新しい仲間が増えたんだよ」

「えっ？」

「こんにちは。カスミ。私、ティアラ。どうぞ、よろしく」

「ああ、こちらこそ。(やばい、ティアラって子。アタシよりステ

ータスが高い。背も脚も、胸も……あと、上品だし)」

一抹の不安が募るカスミであった。

新ポケモン

マスターカップ出場を目指して旅を続けるサトシ達。
途中、ツナギの森で出会ったティアラも加わり、ニシグタウンに辿り着いた。

「ここがニシグタウンかあ」

「ねえ、サトシ。早くポケモン研究所へ行こう」

「お、そうだな。行こうぜっ」

「あ、ちよつと待ってよサトシ」

「みんな、置いてかないでっ」

ポケモン研究所へ一直線に向かうサトシとマサト、

ここニシグタウンはサトシの生まれ故郷・マサラタウンと変わらな
いほどのどかな町だ。

ポケモン研究所は山から見下ろすだけで場所が分かる。

研究所に着き、中に入るサトシ一行。

「すいませーん。誰かいませんか？」

「ごめんくださーい」

「誰もいないのかな？」

「人の気配は確かに感じられないわ」

「でも、出かけてるとかならカギは閉めておくもんじゃない？」

「確かに。開くのはおかしいわね」

研究所に誰もいないから町の人に何処へ行ったか聞こうかと思った
その時、

「こら！勝手に飛び出しちゃダメッ！」

「っ！今、声が聞こえたよね？」

「ああ。確か『飛び出しちゃダメッ』って」

「っつてことは」

「っつてことは？」

ウィーン

《ギャオギャーオ》

「こらあ待ちなさい！」

突然扉が開いたかと思えば、ポケモンと若い女の人が出てきた。

「な、何だ？」

「こつちにくるよっ」

《ギャオオオオオ》

「くくくわっ」「くくく」

サトシ達はポケモンがあまりにも力強く突っ込んでくるので、躲す。

「あれっ？キミ達は確か サトシ君？」

「あ、はい。そうですけど……」

「私はキャリナ。オーキド博士からの連絡で今日サトシ君達が来る
つて聞いたんですけど……」

「何かあつたんですか？」

「うん。それが、新人トレーナーにあげるための3匹の内の1匹が
逃げちゃったのよ」

「さっきのポケモンですよね？」

「うん。困ったな。今日、その新人トレーナーが来る日だっという
のに……」

「だったら、オレ達が捕まえて来ましょうか？」

「えっ、いいの？」

「はい。任せてください！」

「じゃあ、お願いね。さっきのポケモンの名前はギャオル。とつて
も好奇心の旺盛なワンパクなポケモンだから気を付けてね」

「はい」

こうして、ギャオル捕獲計画が始まった。

新ポケモン（後書き）

ちなみに、ギャオルは
ほのうタイプです。

ギャオル捕獲計画！

「見つけたぞギャオル」

サトシは研究所から逃げ出したギャオルを追い、近くの森まで来た。ギャオルは木の実を食べながらご満悦の様子。

「サトシ気をつけて。ギャオルは力が強いから正面から捕まえるのは」

「……………マサト」

「ん？どうしたの？カスミ」

「……………あれ……………」

カスミが指差す方にマサトが向く。すると

「ギャオル！オレと勝負だ！」

「サトシ、色々間違ってる！」

まずは、ギャオルと同じほのうタイプのポケモンで気を引かせてそこを後ろから捕まえるというマサトの作戦が早速も崩れた。

「行けっピカチュウ！」

《ピッカピ》

「……………ピカチュウも乗ってるし……………」

「どうするの？マサト」

ティアラがマサトに質問する。

「どうもこうも、ボクが考えた作戦を強制的に実行するしかないよっ」

そう言っつて、マサトは小さいモンスターボールを取り出し、スイッチを入れ大きくする。

「ほのうタイプのポケモンなんて持つてるの？」

「うん。コイツを連れて来てよかったよ。行けっ！ブースター！」

ポンッ

マサトの投げたモンスターボールが開かれる。

《ブースター！》

「ブースターなんて持ってたんだ」

「お姉ちゃんのグレイシアのタマゴから生まれたイーブイを貰ったんだ」

「へえ」

「ブースター、ほのうのうず！」

《ブー！》

ブースターから放たれるほのうのうずにより、ギャオルの動きが止まった。

「今だサトシ！燃えにくいものでギャオルを捕まえて！」

「分かった！」

『そうは行くかつ！』

すると、どこからか声が聞こえた。

「ん？誰？今の？」

ティアアラが不思議がる。

「カスミ、今の声って」

「ええ。間違いないわ」

「奴らだ」

誰だかもう分かっている3人。

『わーはっはは！』

「また出てきた……」

「まだ出てきた……」

「いつになったら変わるのよ？」

「え？お知り合い？誰なの？この人達？」

「誰なの？この人達？と聞かれたら」

「答えてあげるが世の情け」

「世界の破壊を防ぐため」 「ティアアラ……とりあえず聞いてあげてくれ」

「世界の平和を守るため」

「アタシもう飽きた……」

「愛と真実の悪を貫く」

「ボクも……」

「ラブリーチャーミーな敵役」

「ムサシ！」
「コジロウ！」
「銀河を駆けるロケット団の二人には」
「ホワイトホール。白い明日が待ってるぜっ」
「ニヤーンてニヤ」
「……ロケット団……」
「ちよつとちよつと！少しはやる気を出しなさいよ！」
「そうだそうだ！俺達だって仕事でやってるんだぞっ！」
「わざわざ来てやったというのに不親切なやつらだニヤ」
「別に呼んでないし……」
「あああああ」
「ん？どうした？ティアラ」
ティアラの今の目の状態をアニメ的に表現するならば
「あのニヤースしゃべれるのー？」
キラキラと光っている。
「そうだニヤ。ニヤースはエリート中のエリートなんだニヤース」
「かつわいいい！」
「カワイイかあ？」
「それで、どうしたこんな所にロケット団がいるのさ？」
「よく聞いてくれたメガネボーイ！」
「我々は本日付けでこのニューコウル地方の調査員となったのだ！」
「それって降格したってこと？」
「ちつがうわ！逆よ！昇格したのよ！」
「そうだそうだ！ロケット団の誰も踏み入れたことのない地を我らが先に踏むことになったのだ！」
「ボクがボスだったらこんな無能な3人は選ばないけど……」
「ニヤンてこと言うでニヤース！ニヤース達はロケット団の期待の星でニヤース！」
「こうなったら強行手段よ！ニヤース！」
「任せるニヤース！ポチッとニヤ」

ニヤースがボタンを押すと地面から巨大なロボットが出てきた。

「行くのニヤ！ポケモンまとめてゲットだぜっ君3号！」

「3号つて……………」

「1号と2号を見たことないんだけど……………」

名前はともかく、そのメカは強力で4本の腕の内、3本が伸びる。

狙いはもちろん

《ピーカ？》

《ブース？》

《ギャオ？》

「ピカチュウ！」

「ブースター！」

「ギャオル！」

3匹が捕まってしまった。

ギャオル捕獲計画！（後書き）

設定やら描写が曖昧ですいません。

とにかく、次回も頑張ります。

ギャオルを取り戻せ！

キャリナ博士に頼まれて、新人トレーナーに渡すことになっている3匹のポケモンの内、逃げ出したギャオルを捕まえることになったサトシ達。

ギャオルを見つけ、捕まえようとしたその時、ロケット団にピカチュウ、ブースターと一緒に連れて行かれそうになっていた。

「では、みなさん。再会を喜びたい所ですが、ここは一先ず
「帰るっ」「」

「別にアンタ達と再会したくないわよ！行くのよっ！ギャラド
「待って！カスミ」

カスミがギャラドスを入れたモンスターボールを投げようとしたその時、ティアラが止めに入る。

「どうしたの？ティアラ」

「こんな狭い森でギャラドスなんて大きなポケモンを出しても、ギャラドスが可哀そう」

「でも、そうしないとピカチュウ達が」

「ここは、わたしに任せて！」

「ティアラ、何か方法があるの？」

「もっちろん！（カチャッ）」

「そのモンスターボールは？」

「イトマルを出すの？」

「違うわ。わたしの大切なポケモン、頼んだわよっ！エアームド！」

ポン 《エアアー！》

「エアームド？そんなポケモン持ってたのか」

「エアームド、はがねのつばさ！」

《エアアー!》

ブスツ（ エアームドのはがねのつばさにより、ロケット団の気球に穴が開いた）

「うわああああああ」

気球はもちろん浮かぶことはできず、漏れ出した空気の勢いで少し遠くに飛ばされた。

「あ、そうだ。ピカチュウ達を助けるの忘れてた」

「テツカニン!」

《テツカ!》

「ロケット団の気球を見つけて、ピカチュウとブースター達がいれば、間違いない」

《テツカ》

「エアームド、あなたもお願い!」

《エアアー》

マサトとティアラの指示に従い、ロケット団の気球を探し始めた彼ら。

「ごめんなさい、サトシ、マサト」

ティアラはピカチュウ達を取り戻すことを忘れてしまったことを反省している模様。

「気にすることないさ。ロケット団はそう遠くへは逃げられなくなっただ。それだけでも充分だよ。サンキュー、ティアラ」

「サトシ……」

「フンツ」 （カスミがサトシの足を思いつ切る踏みつける）

「痛ってえええ〜!何すんだよ、カスミ!」

「別に、ただサトシが無性に頭に來たから」

「え?」

「さあ、ピカチュウ達を探しましょう。サトシのためじゃないわよっ、ピカチュウが可哀そうだからよ!それ以外に理由なんてないんだからねっ、分かった?」

「え?あ、はい……」

「じゃ、探しに行きましょう」

《エア》

「エアームド、気球を見つけたのね？」

《エア》 うなずくエアームド。

「こっちよ」

(うう〜ティアアラばっか目立って。アタシの出番は?)

「まあ、気球は壊されたけど、ピカチュウにブースター、ギャオルはまだいることだし」

「このまま、気球を急いで修理して、早く逃げたもん勝ちっ」

「今日は何だかいい感じニヤ〜」

《ソーナンス!》

「あんたはまた勝手にでてきて、戻る」

《ソーナンス……………》

《ピッカ!》

《ブー!》

《ギャオ!》

「おミヤアらは直にボスの所に連れてってやるニヤ」

《ピカチュウ!》

ピカチュウは得意の10まんボルトで檻の破壊に試みる。

《ピカ?》

「ニヤハハハ、ムダニヤ、ムダニヤ」

「例のごとくして、電撃対策はバッチリなのだ!」

《ブー!》

「それも、ムダニヤ」

「熱に強くできている頑丈な檻なの。大丈夫でちゅよ、ブースターちゃん。あなた達はボスが可愛がってくれるでちゅからね〜」

「そうだ、それはありがたいことなのだっ!」

「ニャーもペルシアンの代わりにボスに可愛がってもらいたいニャ」
「あなたもでちゅよ、ギャオルちゃん」
《ギャオ》
「きゃあああああ！」
「ギャオルのひのこだニャ」
「なんてことしてくれるのよっ！顔は女優の命なのよっ！」
「ムサシは女優じゃない（ニャ）」「
「何か言った？」
「（ニャ）なんでもない（ニャ）」「
「とにかく、早く気球を直しなさい！」
「もうできたニャ」
「そう、じゃあ今日は早く切り上げて」
「させるかっ！ロケット団」
「げげっ、ジャリボーイ！」
「ピカチュウを返せっ！」
「返せと言われて」
「返すロケット団がいるもんですか！行くのよっハブネーク！」
《トウツトウツトウル》
「行っけ〜ウツボット！」
《（ガブツ）キャアアアアア！》
「だから、俺じゃないって」
「行くのよ！ギャラドス！」
《ウウウウウウイイウウウ》
「ラゲラージ、頼んだ！」
《ラージ！》
「ハブネーク、ポイズンテール！」
「ウツボット、はっぱカッター！」
《ハブネーク！》
《キャ、キャアアア！》

「ありがと、ギャオルを取り戻してくれて」

「いやあ」

「これで、新人トレーナーに渡せますね」

「そのことなんだけど……」

「どうしたんですか？」

「実は、今日は……というより、今年はこの街から一人の新人トレーナーが旅に出る予定だったんだけど……このポケモンは貰わないことにしたのよ」

「ええ？それって……？」

「いや、家にペットとして飼ってたポケモンを連れて行くことにしたみたいなの」

「そうなんだ」

「てつきり、旅に出るのをやめたのかと思ったわ」

「そういえば、はい、サトシ君。ポケモン図鑑」

「うわあ、ありがとうございます！」

「早速、ギャオルを調べてみてよ」

「ああ」

図鑑を開き、内蔵カメラでギャオルを捕え、そのデータをポケモン図鑑が読み上げる。

【ギャオル ティラノポケモン。古い時代に生存していた生き物に似ていることから、その生き物が進化したポケモンとされている】
「それって、もしかして……ティラノサウルス？」

「断定はできないけど、そうである可能性は1番高いわ」

「へえ〜」

「そして、これが くさタイプのグランビにみずタイプのドルフ」

《ランラン》

《キュイ》

「キヤイ〜ン、このドルフ超かわいい〜」

《キュ〜イ》

「ズツキユーン！悶え死ぬ〜」

「あの、カスミって」

「言っでなかつたけ？みずポケモンが大好きなんだ」

「へえ〜」

「どれどれ」

【グランビ　くさじかポケモン。群れで活動していることが多い。臆病な性格のため、争い事は好まない。別名『森のプリンス（プリンセス）』】

【ドルフ　りくイルカポケモン。発達した尾びれのおかげで4足歩行が可能。成長すると、2本足で立つこともできる。人懐っこい性格】

「へえ。この3匹がニューコウル地方で貰える最初の3匹か」

《ギャオ、ギャオ！》

「あれ〜？ギャオル、どうしたの？」

「ギャオルはきつと、サトシ君のことが気に入ったみたいじゃない？」

「ええっ？」

「よかつたら、貰ってくれないかな？トレーナーがポケモンを選ぶんじゃないって、トレーナーがポケモンに選ばれるのも良いと思わない？」

「え、い、いいんですか？」

「私じゃなくて、ギャオルが望んだことよ」

「んん……………ギャオル、オレと一緒に旅したいのか？」

《ギャオ、ギャオ！》　頷くギャオル。

「ようし、一緒に行こう！」

《ギャオギャオ！》

「ようし、ギャオルゲットだぜっ！」

《ピッピカチユウ!》

「じゃあ、アタシもドルフを」

「それはダメだろっ、カスミ」

「やっぱそうよね……………」

「気をつけてね」

「さようなら」

キャリナ博士に別れを告げて、また旅に出るサトシ達。

新しい仲間、ギャオルも手に入れて、サトシ達の旅はまだまだ続く。

新タイプ登場！ コスモタイプ その1

ニューコウルリーグおよびマスターカップ出場を目指して旅を続けるサトシ達は、

森を抜けようとしていた。

「マサト、最初のジムってベルモニアシティにあるのか？」

「その前に、ランザタウンのランザジムがあるんだ」

「そうか。ようし、ランザジムでバッチゲットだぜっ」

《ピッピカチュウ！》

「それと、ボクも戦うよ」

「え？マサトもニューコウルリーグに出るのか？」

「当たり前じゃんっ！ボクはポケモントレーナー、もちろんポケモンリーグに出るつもりだよっ」

「そうか。カスミはいいとして、ティアラも出るのか？」

「え、ワタシ？ワタシは……出ないかなあ？」

「ええ？じゃあ、ポケモンコンテストに出るのか？」

「え？そ、それも……出ない……かなあ？」

「じゃあ、タケシみたくポケモンブリーダーになりたいのか？」

「ティアラならそれが似合うけどね」

「うん。ポケモンに対する知識と愛情はバッチリだしね」

「ブリーダー？……そ、そうなの。ブリーダーになるつもりよ」

「へえ、頑張れよっ」

「あ、ありがとう、サトシ」

（どうしよう？サトシ達にどう説明すれば……ま、いつか。ベルモニアジムについてからでも）

ガサガサッ

「ん？何か、音がしなかったか？」

「そういえばしたような……」

「あの草むらからだ」

サトシ達は音のした草むらにじっと目を置く。サトシはポケモンが出てくるのを楽しみにしている。

ガサガサ

《マル?》

「ああ、可愛い」

出てきたのは黒目の紫色をして、全体的に丸っこいが、愛嬌のある目をクリッとついてあり、耳はウサギのようなポケモンだった。

「このポケモンは?」

サトシはすかさずポケモン図鑑を取り出す。

【マウル アンテナポケモン。耳が長いのは、宇宙からのエネルギーをキャッチするためにあると言われている】

「へえ、じゃあ早速」

「アタシがゲットするっ!」

「何だよ、オレが先に見つけたんだぞ?」

「何よ、アタシが最初なんだからっ」

「第一、カスミはみずタイプ専門だろっ?」

「ああら、カワイイポケモンをゲットしたい乙女の気持ち分からないの?」

「また始まった」

「ねえ、マサトあの二人を止める方法は?」

「あるけど、カスミに殴られるかも……………」

「……………じゃあ、やめとくわ」

その方法とはティアラのイトマルを使うことだということがティアラにも分かったようだ。

「すいませ〜ん」

すると、サトシ達に向かって声が近づいてくる。

「んん? 誰か来たよ?」

「「ええ?」」

「そのマウルは僕のポケモンなんですっ!」

「ええ？そうだったのか？」「

「見つけてくれてどうもありがとうございます。僕の名前はガウス」

「オレ、サトシ。コイツは相棒のピカチュウ」

《ピカチュウ》

「アタシ、カスミ」

「ボク、マサト」

「ティアラです」

「ありがと、サトシ君達。このマウルは、すぐ逃げ出しちゃうんだ」「そうなんだ」

「お礼に僕の家に入れてくよ。おやつのカッキーが余ってたから」

「いいの？」

「うん。全然、いいよ」

「じゃあ、遠慮なく」

ガウスを先頭にサトシ達はしばしの休息をとることにした。

その草陰で

「見た？」

「見た見た。ジャリボーイとピカチュウ」

「そっちじゃないわよっ。あのマウルとかいう超カワイイポケモンよ」

「そっち？」

「多分、この地方にしかないポケモンだニヤ。捕まえれば、ボスも大喜びだニヤ」

「それにしても、見た目はノーマルタイプっぽいのに、あの色からしてどくタイプなのか？」

「いいや、あれはきつとゴーストタイプなのニヤ」

「ここが僕の家だよ」

「へえ、立派な家だな」

「ありがと。そこに腰かけてて、今クツキー持ってくるから」
「うん」

言われた通り、テーブルのイスに腰掛けるサトシ達。

「おまちどうさま。召し上がれ」

「……いったきまゝす」「……」

がつつくわけではないが、予想以上の量のクツキーにサトシはつい、手が止まらない。

「ねえ、ガウス」

「なんだい？」

「その、マウルってどくタイプなの？」

「え？」

「いや、その色ってよく、どくタイプかゴーストタイプの色なのか
なってると思って」

「ああ。違うよ。マウルはコスモタイプなんだ」

「……コスモタイプ？」

「あれ？みんな、知らないの？」

「うん。カント、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イツシュと
旅してきたけど、コスモタイプを持ったポケモンなんて……」

「見たことないわ」

「そうか、コスモタイプはその地方にはいないタイプだもんね」

「へえ、そうなのか？」

「へえ」

「コスモタイプはでんき、ドラゴン、むし、ひこうに強い上に、か
くとうとどくタイプの攻撃は効かない。だけど、ゴーストとエスパ
ー、あくタイプに弱いんだ」

「知らなかったわ」

「コスモタイプってまさか……宇宙からきたポケモンの事？」

「まさか、みんなデオキシスってわけじゃないんだ。コスモタイプ
は宇宙のエネルギーを使えるだけだよ」

「へえ、それにしても、すごいなあ」

「初めて見たもんね」

「なあ、ガウス。オレとポケモンバトルしないか？」

「えっ？」

「相手はもちろん、そのマウルでどうだ？」

「いいよ、受けて立つよ」

新タイプ登場！ コスモタイプ その2

「それじゃ、1対1でいい？」

「ああ、いいぜ」

ガウスにポケモンバトルを申し込んだサトシ。

ガウスの家の庭でポケモンバトルが始まるうとしていた。

「ようし、行け！マウル」

《マルマルツ》

「こっちは ギヤオル、君に決めたっ！」

《ギヤオギヤ！》

「ギヤオルか 用心しなきゃな。そっちの先攻でどうぞっ」

「分かった。ギヤオル、かみつくこうげき！」

《ギヤオギヤ！》

「かわせ！」

《マウル！》

「あの、マウル。相当すばやいよ」

「サトシはどうするのかしら？」

「ギヤオル、ひのこ！」

《ギヤオ！》

「マウル、ブラックホール！」

「ブラックホール？」

「ブラックホールは相手の技を吸収して、自分の次の攻撃をあげる技よ」

「え、どうして知ってるの？ティアラ」

「え？あ、いや……本で読んだことがあるの……」

「へえ」

「あれって、コスモタイプの技なの？」

「ええ、そうよ。それに、ブラックホールは」

「「ブラックホールは？」」「」
「相手をひきつけることもできるの」
《ギャオ、ギャ……………》
「負けるな！ギャオル、いやなおとー！」
《ギャギャギャギャギャ！》
「うう、これは流石にきつい……………」
「マウルにも結構効いてるわ」
《マ、マル……………》
「ひるんじゃだめだ！マウル、ホワイトホール！」
《マウル、マア！》
「ホワイトホール？」
「ホワイトホールは、ブラックホールで吸収した技の威力をプラスして相手に攻撃する技よ」
《ギャオ！》
「ギャオル！」
「ギャオル、かなりのダメージだ」
「ギャオルが負けてる……………」
「マウル！ビックバンレーザ！」
《マルマルマルマル……………！》
「ビックバンレーザは撃つのに時間はかかるけど、当たればこんらんすることもある強力な技よ」
「え？気をつけてサトシ！」
「撃つのに時間がかかるなら、そこを狙うしかない！ギャオル、ひのじー」
《ギャオ ……》
「はい、そこまでー」
《ギャオ？》
《マル？》
「ああ、ギャオル！」
「マウル！」

「何なの一体？」
「何なの一体と声がする」
「地平線の彼方から」
「ビックバンの彼方から」
「我らを呼んでる声がする」
「お待たせニヤ」
「健気に咲いた悪の花」
「ハードでスイートな敵役」
「ムサシ！」
「コジロウ！」
「ニヤースでニヤース！」
「ロケット団のある所」
「世界は」
「宇宙は」
「君を待っている！」
《ソーリーナンス！》
「ロケット団！」
《ピピカチュウ！》
「というわけで、ギャオルと」
「超力ワイイ、マウルちゃんはいいただきよっ」
「それでは、バイニヤラニヤライバ！」
「待てっ！ロケット団！」
ロケット団にギャオルとマウルを奪われたサトシとガウス。
さあ、どう取り戻すのか？

新タイプ登場 コスモタイプ その3

ロケット団にサトシはギャオルを、ガウスはコスモタイプのマウルを奪われてしまった。

ロケット団は高笑いをして、気球で退散しようとしている。

「あいつら、また懲りずにい……………行け」

「待って、マサト」

マサトがモンスターボールを投げようとした瞬間、ティアアラが止めた。

「ここは、ワタシに任せて」

「ティアアラ？」

「頼むわよ、イトマル！エアームド！」

2つのボールを同時に投げたティアアラ。

「イトマル、エアームドの背中に乗ってっ！」

《マルイトツ！》

指示通りにイトマルはエアームドの背中に乗る。

「イトマル、いとをはくっ！」

《マルイトツ！》

目にも止まらぬスピードで吐かれた糸は気球の籠にくっついた。

ピタッ

「あれ、ちよつとニヤース、動かなくなってるわよ」

「あニヤニヤ、おかしいニヤ」

「おい、あれを見るっ！」

コジロウが指差す方向をニヤースとムサシも見る。

「イトマルの糸がくっついて動けないんだ」

「うっそ〜！」

「エアームド、はがねのつばさで網を切って！」

《エアームド！》

ブチッ

《ギャオ?》 《マル?》

ギャオルとマウルは少し驚いたような表情を浮かべて落ちた。

「ギャオル」「マウル」

ギャオルもマウルもトレーナーの手元に収まった。

「ようし、エアームド! ラスターカノン!」

《エアア、エアア、エアッ!》

ラスターカノンが目標目掛けて一直線。

ブスッ

シューウウウ

「……もしかして……?」「」

気球は飛べる訳もなく、空気の漏れ出す勢いでそのままどこかへ飛ばされてしまった。

「……ヤな感じ……」「」

もちろん、決めゼリフを吐きながら。

「ようし、ガウス。バトルの続きだ」

「オッケー!」

二人はトレーナーボックスに入る。

「行けつ、ギャオル!」

《ギャオ!》

「頼むよ、マウル!」

《マウマ!》

「ギャオル、ひのこ!」

サトシが先手を取る。

《ギャオギャオ……》

ギャオルはいつもより長くひのこの発射を溜めた。
すると

《ギャオ、ギャオ!》

ひのこは一つの大きな弾となって発射された。

「何だ? 今のは?」

「ひのこにしては大きすぎない?」

「うん、それに一発しか出てないよ」

「もしかして……」

「どうしたの? ティアラ」

「サトシ! もしかしたらギャオルはフレイムロックを覚えたんじゃない?」

「…」

「フレイムロック?」

「そう、ほのうタイプといわタイプの両方を併せ持つ技よ」

「そんな技があるのか?!?」

「よそ見してる場合じゃないよっ、マウル、ブラックホール!」

《マウマッ!》

マウルはギャオルのフレイムロックを吸収した。

「やばい、次にホワイトホールが来るかもしれない。ギャオル、い

やなおと!」

《ギャギャギャ》

《マ、マウ……》

「よし、いいぞ、ギャオル。フレイムロック!」

《ギャオギャオギャオ　ギャッ!》

フレイムロックが放たれた。

「マウル、ホワイトホール!」

しかし、既に遅かった。

フレイムロックはマウルに激突した。

《マウマ!》

「ああ、マウル!」

マウルは今の一撃もあるが、さっきまでの戦いの疲れが出たのか、立ち上がれなくなっていた。

「ボクの負けだ」

「やったぜ、ギャオル! お前、すごいぜっ!」

《ギャオギャ!》

サトシに褒められて、ギャオルは満面の笑みを浮かべる。

「今日はありがとう、サトシ。パパとママが帰ってきたら、旅に出てもいいか聞いてみるよ」

「ようし、どこかで会ったらまたバトルしようぜっ！」

「こつちこそ、よろしく！」

二人は握手を交わす。

「うん、いい感じに青春だわっ！」

それを見たティアラがこぼす。

ガウスと別れを告げ、また歩き出したサトシ達。

ニューコウルカップそして、マスターカップ出場を目指すサトシ達の旅はまだまだ続く。

グランビを追って

今日も旅を続けるサトシ一行。
すると

ヒュンヒュンッ

「おっ、今のポケモンって確か
「グランビだよ」

「やっぱりな、この地方で新人トレーナーが貰える3匹のポケモン
の内の1匹だ。オレ、前から欲しかったんだよなあ」

「ボクも！」

「マサトもかあ」

「だって、ボクがゲットしたポケモンの中でくさタイプを持つポケ
モンは1匹だけなんだ」

「へえ、ちなみに何だ？」

「ノクタスだよ」

「でも、別にグランビじゃなくてもいいんじゃないか？」

「いやいや、サトシ。グランビは進化するとフォウルに、また進化
するとロイールになって、くさ以外にいわタイプも付くんだよ」

「くさにいわ……オレも欲しくなってきた！ようし、グランビをゲ
ットするぞー！」

《ピーカチュウ！》

「ああ、ちよつとサトシ！」

「ボクが先だ！」

「マサト！」

「二人とも元気ねえ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！二人が行った場所って
道じゃないのよ！マサトはともかく、サトシだと、色々危険だわ」

「そうねえ、カスミにとつちやサトシの方が心配だよねえ」

「ち、ちがつ、そういう意味じゃなくて、アイツなに仕出かすか分かったもんじゃないからで」

「分かった分かった」

「ううう、とにかく行くわよ！ティアラ！」

「はい」

「おい、どこだ？グランビ」

「グランビー！出ておいで、おいしいポケモンフーズがあるよ！」

「グランビー！」

「グランビー！」

「グランビー！」

「グランビー！」

「グランビー！」 「グランビー！」

ゴツンッ

「「いつてててえ〜」」

「マサト、邪魔すんなよ」

「サトシの方がぶつかった来たんじゃないか！」

「いいや、マサトが先だよ」

「サトシだ！」

「あ、いたいた。こんなところに」

「二人とも、ケンカはダメだよ」

「「だつてさ〜」」

カサカサッ

「ん？今、あの草むら、動かなかったか？」

「だよね」

ヒョコッ

飛び出したのは、少し小さめの角だった。

「やっぱり、間違いない。あれはグランビだ！」

「オレが先にゲットしてやるー！」

「ああ、サトシに先越されたあ」

「ギャオル、キミに決めた！」

《ギャオ！》

「あの草むらに向かってひのこ！」

《ギャオギャオギャー！》

ギャオルの放ったひのこは草むらにいるグランビを捕えたが

《ビィ？グラッ！》

いとも簡単に躲かされてしまった。

その代わりに

ダンダンダンッ

後ろの木にひのこは命中し、

《《《デスデスワ！》》》

凶暴そうなむしポケモンが大量に現れた。

「む、むしい……」

カスミは卒倒。

「あのポケモンはなんだ？」

サトシは興味津々。

「あれは、デスワップよ」

「デスワップ？」

【デスワップ スズメバチポケモン。獰猛な性格で、自分より体
が大きく強そうな敵でも攻撃してくる。また、黒いものを見ると、
無差別に警戒し攻撃する】

「とにかく、危険なポケモンよ！逃げなきゃ」

「で、でも、カスミが動けないんだ」

「ど、どうしよう」

「そうだ、ピカチュウ、10まんボルト！」

《ピカチュウ！》

《《デデデデデー》》

「ようし、効いてるぞ！」

《《デスデスワー！》》

「あれ、全然動じてない？」

「まだ、身の危険を感じてないから逃げないのよ」

《《デスデスデス！》》

「こつちにくるぞ！」

もう、為す術がなく、絶体絶命のピンチになったその時、

「ラッキー、タマゴばくだんだ！」

《ラッキー、ラッキー！》

ボガンツ

爆発により、身の危険を感じたデスワップは、

《《デスデスー》》

縄張りへ帰って行った。

そして、爆風が風によってかき消された時、恩人の姿が現れた。

「コタ、タケシい？」

「よお」

「え、だ、ダレえ？」

それは懐かしき仲間だった。

グランビゲットだぜっ！

「ここまでくれば、もう安全だろう」

「ありがとう、タケシ。助かったよ」

「礼には及ばない。本当に助けたのはラッキーだしな」

《ラッキー！》

「ラッキー、ありがとうな」

《ラッキー》

「あのう、どちら様ですか？」

「そうか、紹介がまだだったな。こっちはタケシ。前に色んな場所を旅してきた仲間だ」

「よろしく」

「あ、よろしくお願いします」

「前はニビジムのジムリーダーだったんだ」

「へえ、元ジムリーダーかあ。すごいなあ」

「今はポケモンドクターになって、色々な地方の珍しい薬を集めたり、ポケモンの生態について色んな人に教えて周っていたのさ。このニューコウル地方は珍しい薬草が多くあつたりしてるから、探しながら病気のポケモンを治療したりしている、移動ドクターさ」

「へえ、それはすごい……」

「……………ん？」

カスミはティアラのちよつとした異変に感づいた。

「そして、こっちはティアラ。途中で仲間になったんだ」

「は、はいっ！そうです……」

「へえ、そうか」

「は……はい……」

「ちよつと、ティアラいい？」

「えっ？」

カスミがティアラを引っ張る。

「ティアラ、間違ってたら否定してもいいけど……タケシに惚れた？」

「ええっ！？な、なんで……？」

「凶星かぁ……ま、頑張りなさい」

「えっ？それって、お互い様じゃ……？」

「アタシは関係ないわよっ！」

「でも、赤くなって「ない！」……そう」

「ところで、サトシ達は何でデスワップに追っかけられていたんだ？」

「グランビを捕まえようとしてさ、ギャオルにひのこを指示したんだ。そしたら、グランビが避けて、木に当たったら、それがデスワップ達の住処だったみたいでさあ」

「デスワップは気性が荒い。自分より弱そうな、戦う意思のない相手には攻撃をしないが、それ以外のには容赦はない。特に、ポケモンを連れた人間には一番獰猛だ」

「そっか！だから、グランビには攻撃してこなかったんだ！」

「そういうことだ。グランビを捕まえたのなら、グランビに懐かれることが先決だ。グランビは争い事を好まない。ポケモンバトルも恐れている部分がある」

「じゃあ、バトルしないでグランビを捕まえるってこと？」

「そういうことだ。俺に作戦がある」

「ピカチュウ、お前は本当にカワイいなあ」

《ピカピ》……》

「すごいカワイイぜ。目に入れても痛くないさっ」

《ピカピーカ……》

「ブースター、君は毛ツヤがよくてキレイだよあ」

《ブ、ブースター……》

「もう、君の炎にならやられてもいいよ」

《ブー!》

「ぎゃああああ! (ボタンツ) - ブースターの炎つて1700あるって言われてるけど……これがそうなんだっ、感激……けふっ」
「何故、彼が生きていられるのかは疑問に持つても解明はできない。」
「作戦その一、自分はポケモンが大好きだということをグランビにアピールする」

「確かに、いい作戦かもしれないけど……ピカチュウ達が嫌がって
ちや意味ないでしょ!」

「ちよつと、ピカチュウがサトシに引いてるもんね」

「もう、こんなんでグランビが寄ってくるわけ……」

《グラ?》

「「来たっ!」」

「どうだっ? 俺の作戦は完璧だっただろう?」

「結果オーライなだけ……」

「グランビはサトシの方へと歩み寄る。」

「おお、グランビ。こっちに来いよっ」

《グラ?》

「まだ、警戒してるようだな……」

「どうするの? 寄ってこなかったら、元も子もないわよ」

「その為にフェーズ2を実行するのだ!」

「言い方を統一して……」

「ほら、グランビ。おいしいポケモンフーズがあるぜ。おいでっ」

「(キュン) -」

「ポケモンフーズをあげる作戦だ」

「そ、そう」

「カスミ、顔が赤いわよ?」

「赤くない!」

《グラ……クンクン》

「おいをかいでる」

《グラッ！（モシヤモシヤ）……》

「食べた！」

「よっつしゃ！」

《グラ、グラ》

「グランビはもう懐いたみたいね」

「なあ、グランビ。オレ達と一緒に旅をしないか？」

《グラ？………ビィ》

《ピーカチュウ》

《グラッ！？グラッ！》

「おお、来てくれるのか？」

《グラ、グラ！》

「ようし、今日からお前はオレ達の仲間だ。よろしくな」
モンスターボールを取り出し、グランビに当てる。

ポン

モンスターボールは3回揺れた後、収まった。

「ようし、グランビゲットだぜっ！」

《ピッピカチュウ！》

「早速、グランビを出して」

《グラッ！》

「よろしくな、グランビッ」

サトシがグランビを撫でようとしたその時

ガシッ

《グラ？》

「ああ、グランビッ！」

「ひよっとしてまた？」

「またってまた？」

「そう、そのまた」

「……わーっはっはっは！」「」「」

「またアナタ達なの？」

「まだお前達なのか？」

「またかまだかと言われたら」
「答えてあげるが世の情け」
「オレのグランビを返せっ!」
「ちよつと!まだ口上の途中よ」
「そつだそつだ!人の話は最後まで聞けつてママに教えられなかつたのか?」
「ママは怪しい人たちの話は聞いちゃいけないつて」
「怪しくな〜い!」
「そつだよ、サトシ。ロケット団は怪しくないよ」
「ニヤ?メガネジャリが珍しくニヤー達の肩を持つてくれたニヤ」
「メガネジャリ〜!」
「バカなだけだよ」
「「こら〜!」」
「それは置いといて」
「置いとくなつ!」
「オレのグランビを返せっ!」
「返すもんですかっ!アンタのポケモンはわたしのもの。わたしのポケモンはわたしのなのつ!」
「見たかっ!時々使う他人がポケモンをゲットした後に油断してる時に横取りする賢い作戦をつ!」
「自分たちでゲットすればいいんじゃないのお〜?」
「それじゃ、ダメなのよね〜」
「とにかく、グランビをこの網に入れるニヤ」
「それでは帰るっ!」
「待てっ!ロケット団!」
「待てと言われて待つもんですかっ!」
「ピカチュウ!10まんボルト!」
《ピーカジュウ!》

しかし、グランビを入れた網の袋は破れなかった。
「ニヤははは、例によって電撃対策は万全ニヤ」

「だったら、ギャオル」

「待て、サトシ」

「え?」

「ギャオルの炎で網を破ろうとしているようだが、そしたらグランビまでやけどを負う危険性がある」

「じゃあ、どうしたら?」

「ポケモン図鑑でグランビを使える技を調べるんだ」

「そうかっ!」

【グランビの使える技　たいあたり、なきごえ】

「ダメだ!くさタイプの技が使えない」

「やったぜっ!今日こそはジャリボーイたちに勝てた!」

「これで出世の道はそう遠くないのニャ!」

「『いいカンジい』」

《グレア》

袋の中でしたばたしているグランビに異変が……

「グランビがなにかしそうだぞっ」

《グウラア〜〜ビィ》

ズバツ

グランビが発動した技により、網はおろか、気球まで破れた。

「『えっ?』」

シューウウウ

「どうしてこうなるのよ?」

「おれ達には運がないのかも……」

「ニャー!せつかく、出世の道が開けたと思ったのにニャ!」

「『『ヤなカンジい』』」

「グランビッ!」

サトシは決死のダイブでグランビをキャッチした。

「大丈夫か?」

《グラグラッ!》

「そうか、それはよかった」

「きつと、あの時グラスミキサーを使ったんだろう」

「そうだな。すごいなあグランビ」

《グランビ！》

「ねえ、二人とも、安心はできないよ」

「「えっ？」」

《《《デスデスワー！》》》

「うわー！さっきのデスワップ達だっ！」

「む、むしい」

「また、カスミがダウンだ」

「こうなったら、ラッキー」

《グランビ！》

「ん？グランビ。お前が行くのか？」

《グランビッ！》

《《《デ、デスワー》》》

「あれ？デスワップ達が逃げて行った」

「デスワップはきつとグランビの攻撃をやめてほしい気持ちを理解

してくれたのかもな」

「そうか、サンキュー、グランビ」

《《《グランビ！》》》

こうして、サトシに新たな仲間、グランビが出来た。

ライバルトレーナー・デルタ

ニューコウルリーグを目指すサトシは、グランビも捕まえ、タケシも仲間に加え、旅を続けていた。

「そろそろ、お昼ができるぞ〜」

「ようしつ、みんな出てこいッ!」

サトシを筆頭に、カスミ、マサト、ティアラがボールからポケモンを全部出す。

「え〜つと、オレのピカチュウ、ギャオル、グランビ……」

サトシは念のため点呼を取り始めた。

「マサトのラグラージ、テッカニン、ブースター。ティアラのイトマル、エアームド。タケシのラッキー、グレッグル」

最後にカスミのに移る。

「カスミのギャラドス、マリル、コダック、ニョロトノって、確かに前にサニーゴが居た気が……」

「ああ、お姉ちゃんたちがショーで使うって言うから貸したの」

「そうか………ん？」

「どうした？サトシ？」

「カスミはポケモンを四匹持つてるのに、オレはまだ三匹？オレの方が負けてる？」

「でも、カスミは元々持つてるポケモンを持ってきて、サトシはギャオルとグランビを捕まえたんだから、別に気にしなくても……」

「気にするっ！たとえそうでも、オレの方が多くないとヤダッ!」

「まあた、変な所気にしちゃって」

「ピカチュウ!今すぐ、ポケモンをゲットしにいこうぜっ!」

《ピーカ……》

「ピカチュウはお腹空いてるみたい」

「ダメだ!後にしようぜ!ゲットしにいこうぜ!なるべく、とりポケモンをゲットしたい!みんな、先に食ってて!オレ、後からにす

るから！」

言い終わる頃には、サトシの声はもう遠くなっていった。

「そんなに意地張らなくなつて……ねえ、ピカチュウ」

「カスミ。ピカチュウはサトシが連れて行つたぞ」

「いつの間につ！？」

「いないかな？とりポケモン。なあ、ピカチュウ」

《《ピイ……カ……》》

空腹がピークなピカチュウは答えることすら難儀だった。

サトシがとりポケモンを探し、ウロウロし、一度止まったその時。

ガサガサッ

木の上の方から音がした。

「今のは？」

バツ

《《《カヤー》》》

木の枝から、数匹のとりポケモンが飛んできた。

「あれは」

【カヤブサ ハヤブサポケモン。とりポケモンの中で最も速いと言われているポケモンの中の一つ。一度つかんだきのみは絶対に離れない】

「かけえー。ようしっ、アイツに決めたっ！ピカチュウ！10まんボール！」

《《ピーカーチュウ！》》

お得意の技は、いつもより乱れてはいるが、カヤブサの一匹に命中した。

効果抜群の技を喰らったカヤブサは真つ逆さまに落ちる。

「よし、行けッ！モンスターボール！」

サトシは素早くモンスターボールを投げる。

モンスターボールはカヤブサの体を収め、地面に落ちる。

緊張が漂う中、3回震えた後に静かになった。

「よっしゃあ！カヤブサ、ゲットだぜっ！」

《ピーピカ……………チュウ……………》

限界のピカチュウは軽く倒れた。

「ごめんな。ピカチュウ。ありがとう。んじゃ、タケシたちの所に戻るか」

ピカチュウを抱え、戻ろうとしたその時。

《グマー！》

「げっ、リングマ！」

さっきの10まんボルトの乱れにより、寝ていたリングマをおこしてしまった模様。もちろん、リングマはご立腹だ。

「逃げろっ！」

サトシが逃げ出そうとしたその時。

「ローブシン。ばくれつパンチ！」

《ローブ！》

横から、ローブシンのばくれつパンチが炸裂し、リングマはそのまま遠くへ飛ばされてしまった。

「いやあ、助かったよ。ありがとう。オレ、マサラ」

「ちよつと君っ！」

「は、はい……………」

ローブシンと思われるトレーナーが現れた。年齢は見た目的にサトシと同じくらいだ。

「困るんだよ。さっきのリングマ、僕が捕まえようとしたのに」

「あ、ご、ごめん」

「全く。僕は君とは違って、そんな弱そうなカヤブサなんかより、あの強そうなリングマが欲しかったのに」

「弱そうなカヤブサ……………？」

「そっだ。たとえ、でんきタイプに弱いとしても、一撃でやられるなんて論外だ。君はそんな弱いカヤブサが欲しいのかい？僕とは大

「違いだ」

「初めは弱くても、育てていくうちに強くなるさ。どんなポケモンだって」

「そうかな。僕にはそうは思えないな。もし、君の言うことが正しいとしてもトレーナー自身が弱そうだし、強くはなれないな」

「なんだとお？」

「やる気かい？言っておくけど、僕は挑発したつもりはないよ？修行の邪魔をしないでくれないか？それじゃ」

「待てよ」

「なんだ？」

「オレはマサラタウンのサトシ。オレとポケモンバトルだっ！」

「受けてたとう、弱そうな君。僕はループシティのデルタ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8173p/>

ポケットモンスターAfter Story

2011年12月23日01時47分発行